

引用、参照論文の批判等が殆ど省略せられてゐる嫌はあつたが、然しこれは又一面廣汎な機關史を吾人に平易に且概括的に了解せしめるものである。尙機關研究の歴史、羅布渾爾地方の地勢の變遷に關する二章が加へられてゐること、卷頭に機關廢墟の發見者 Sen Heidin 氏が序文を寄せて、氏の發見にかゝる古文書類の研究が、K. Himly 氏より A. Comandj 教授に、更に又本書の著者 A. Hermann 氏にと相繼がれた有様を、言はゞ本書の生ひ立ちの記を深い感慨を以て記してゐるものも看過せられなごうである。(一六〇頁)、挿畫六六、附圖七 *Texte*: H. A. Brockhaus, R. M. 6.50—麻裝—7.50〔内田〕

### ● 歐人の支那研究

#### 石田幹之助著

學東西に通じたる博學の石田氏が筆をとつて「歐人の支那研究」なる一書をものせられた。待望久しかりし本書を机上に備ふるを得た事を非常な喜びとする。

さて本書の内容を一瞥するに、

一、序説 二、古代及中世初期に於ける支那に關する智識 三、中世後期に於けるアラビヤ人の支那に關する智識 四、蒙古人物興時代に於ける支那に關する智識 六、東印度航路の發見と歐人の東航宣教師の支那研究支那學の成立なる六章に分たれる。其概略を述べれば、

第二章古代に於ては西曆紀元前後「ギリシヤ」人の間に支那が「セリケ」「セレンス」の名によりて知られると共に他方「シン」「シ

ナイ」の名を以て知られた二派の智識が存在した事を説き、中世初期に於ては東ローマと突厥との交渉に由りて、支那は「タウガス」「チニスタン」なる名によつて紹介されたりと言ふ。

第三章中世後期となるやアラビヤ人の活動目覺ましいものがあり、支那を紹介するに與つて力ありたるアラビヤ人「イアン・ホルダードベ」「アブサイド」等を説く事極めて詳細である 第四章蒙古人物興時代に入るや有名なる「プランカレピニ」「ルアルツク」更に又「マルコポーロ」の三大旅行家の報告に關する解説至つて詳密である。

次章に於ては、元より明初にかけて支那に渡來せる幾多の宣教師及商人によりて書き殘されたる書簡並に報告、即ち前者の作にかゝる「オドリコ」の紀行東方タタリ奇聞、或は後者の「商業指南」等を此時代に於ける支那に關する智識として述べられ更に歐人ではないが東方の見聞を西洋に齎らしたものととして忘れる事の出來ぬ「イアン・パツタ」の事蹟を掲げてある。

最後の章に於ては東印度航路の發見以後支那に來れる宣教師の支那研究に就いて述べられこの時代を更に區分して「明清鼎革の時代及康熙帝の初期、康熙中葉より雍正時代、乾隆隆時代之三となす。而して歐人の眞の意味に於ける支那研究はこの時代に始まり、こゝに於て歐人の支那學は成立せるものと見做され、各期を通じて支那研究に貢獻した宣教師並に其の功績を説く事詳細である。然しこゝに一々列舉する餘裕を有しない爲に省略する。最後に近世支那學の鼻祖と云はれる「レムユイザ」

並に「クラプロート」の支那研究の有様を記して筆をとりて居られる。

蓋しかゝる種類の研究を集大成したるは實に氏のこの著述を以て嚆矢とするものと思ふ。氏が維多利亞資料をよく取捨して僅々二百五十餘頁の書物に纏められたる努力見識に敬服する。又諸研究者の略傳並に其の背景をなす時代の概略を述べられたる事は初學者にとりてこの上もない便宜である。只著者が人名地名に關して從來の慣例を襲つて、「ペーター」を「ピョートル」に「オゴタイ」を「エゲデイ」と改められた見識には敬服するも、一歩進めて其の原字を本文に示されたならば讀者の便宜はより大であらうと思ふ(著者自ら凡例に云はれる所ではあるが)又本書に於ては「クラプロート」以後に及ばない事は非常に物足りなく感ぜられる。然し近き將來に於て、これに續く力作が現れるであらう事を期待してやまない次第である。

今こゝに紹介するに當つて本書の眞價を傳へ得ない事を恐れる。願はくば親しく本書について一讀せられし事を切望す、

(共立社發行、現代史學大系第八卷、定價壹圓五拾錢)(山本)

● 東西交渉史の研究 南海篇

藤田 豊八著

「東洋史研究の起りしより既に三十餘年、その間東西大學の教授及び出身者にしてこれに従事し、史界へ貢獻したるもの少なからず。而して西域方面の開拓者としては、先づ東京の白鳥博士、京都の故桑原博士を推さざるを得ず。その研究論文の發表

せられたるもの頗る多きは人の知る所なり。但南海方面に關しては、これに手を著けしもの少なく、その研究は西域方面に比して遜色ありき。然るに大正の初め頃よりこの方面の開拓を試み、突如として頭角を史界に顯はしたるものあり、これを故劍峰藤田博士となす」とは東洋史界の先達市村博士が本書序文の劈頭に題せられた一句であつて、故藤田博士の學績をよく言ひ表はしたもと思ふ。故藤田博士は明治二十八年東大卒業後劍峯の號を以て支那文學哲學の方面に縱横の筆を揮ひ、やがて支那に渡り教育事業と操觚界とに活躍されて或は支那哲文關係の諸論文となつて現はれ或は時事問題を論じた經世策となつたと共に、その間に一面許多の書籍を蒐集讀破されて純手たる史的研究所を試みられ、殊に支那を中心とする東西交渉史の研究に没頭されたのであつた。其の成果が明治末年の歸朝前後より學界に問はれて遂に、此に一書をなせる南海篇に收められた諸論文となり、又やがて近く上梓の「西域篇」に收められる諸論文となつたのである。而して故藤田博士の研究が愈々進み學界均しく巨像を仰いだのは大正末期より昭和にかけて數年間であつて、明敏な頭腦と鋭利な觀察とにより前人未踏の新天地を開拓し斬新奇警な新學說は一時を聳動せしめられたのであつた。さて本書收録する所は大正二年一月東洋學報に掲載の「狼牙脣國考」以下、昭和二年十一月史學雜誌所載の「佛徒の印像につきて」迄の二十三篇に及び、何れも東洋學報、東亞研究、藝文、史學雜誌東洋時報、史林及び白鳥博士選厝記念東洋史論叢に掲載された